

第一回刀剣美術論文賞 発表

本誌でお知らせの通り、当協会は昨年、刀剣等の研究奨励を目的として「刀剣美術論文賞」を設け、第一回は『刀剣美術』平成二十六年四月号から平成二十八年三月号まで掲載された論文が対象となりました。三月号発刊後に推薦委員からの推薦を受け、四月二十一日開催の選考委員会において「第一回刀剣美術論文賞」が次の通り決定いたしました。

花岡忠男氏「真雄・清麿と兼虎 逸史残塵」

本論文は、平成二十七年三月号より七月号まで五回に分けて掲載された大作です。今回の選考は、郷土刀研究を真摯に続けられ、背景の郷土史にも精通された花岡氏の永年に亘る研究と、刀剣への情熱・愛情溢れる内容が高く評価されたものです。花岡忠男氏には賞状及び賞金が贈られました。



花岡氏

「論文賞」受賞の謝辞

花岡忠男

事務局からの通知は将に、青天の霹靂で、望外の恵与であった。初稿の

活字化から四十七年という星霜を経、時年八拾有る余式歳の老骨である。斯界の片隅で数寄の歴史横丁、その閑歩余話を誌したのみに。私の五代前祖の一人、文右衛門吉平は近隣の真雄刀の研磨で渡世、他家に養嗣入りした。山浦本家後裔が、上田城東で南隣に住み続けた人縁・地縁とがある。兼虎孫の環（清麿実名）・昇（真雄実名）ご兄弟の教導と、刀匠父子の数多い覚書・反古による恩沢―その果報である。

郷関古老達からの清麿逸話を聴き育った、最後の語り部。

該当論文の執筆動機は、平成の世の

「古刀値下がり」現象で前代未聞の潮流に、本道逸脱の軽佻危懼を抱いた事による。加えて、人気が、実力と確信し教える業者の既成観念、その奴隷と成った馴致盲信に疑念もあつた。

人気（大衆性）の実態は曖昧模糊として虚実の緋い交ぜ幻想でもある。恣意的な商業宣伝で造られた虚像と、実像の線引き論文は大衆趣好に媚び諂わぬから、異端の辛口硬筆で孤立する。ましてや超人気者の偶像を鋭鋒峻厳で破壊した。それにも拘わらず意外の受賞に驚愕、感謝の念で誌しある。該当論文の異質は、古刀評価の低視を刀剣哲学の浮薄化反映とした、警鐘の意に在る。刀剣の存在原点は実用武器である。

切れ味拔群と強韌耐久の指向で、厳然たる道理は動かない。刀の要諦は古来より「①に姿、②に地鉄、③に刃文」と決まっている。合目的機能を最優先した侍の活眼―研ぎ澄まされた、武家目利き、は死語となつた。これに対する、商人目利き、は工藝美術品の華彩を尊ぶ。武術無き民衆の俗眼である。

③の焼刃高く絢爛、刃中の働きの景色は凜然躍動美の魅力。反面、冶金学では鉄の均質至純と乖離で実戦には劣る。質実より刀剣絵画視は虚眼の形骸化に似たり。例えば武士の眼の実績名工（句

主調の小沸え包み真雄）と、商人の

工藝名工（沸え主調の清麿）は明確に分岐する。前者は伝統を守り地味・渋味で含羞の佇まい。後者は自己主張の銜い派手な伊達姿。

武器である以上は武士の活眼こそ本筋であるが、時代変遷は感性趣好優先の必然性で、復権はもはや期し難い。

扱、日本刀の精粹を一筆。人類の古典的武器は次々と消滅。唯一製作し続けている現実が日本刀の不思議さ。元和偃武で実用の使命は終えたのに。それは秋水の霜華と美称される典雅清爽・光鋸燦然・神韻縹渺の刀剣に宿る、霊的尊崇の神格視で、武士道精神の裏付け具象である。その法灯不滅は、質朴な現代刀工諸氏と関係職方が担っている。（以テ六尺ノ孤ヲ託スベシ）（論語「泰伯篇」といった人柄が多い。

業者はそれで糧を得る以上、現代刀への理解深化で愛刀家をより教導すべき義務を思う。亦云う。黄昏、落暉よ、世に埋もれ眠る名匠の墓碑を照らし、飾れかしーと。

本誌の学術的水準は高格である。先達の史学累積が基底に在り、前途の栄を祈る。最後に戦前教育の旧仮名遣い拙稿を、精緻校正で永年支えくださった編纂の労に、深甚の謝意を誌して擲筆する。

此ノ日 南窓清暉 松涛風韻